

九州地方 ESD 活動支援センター（仮称）設置準備委員会

第 2 回 委員会議事要旨

日時：平成 29 年 1 月 27 日（金）14:30～17:00

於：九州地方環境事務所会議室（入札室）

1. 開会

2. 出席者紹介

事務局から出席者の紹介。出席者は、資料 1 「九州地方 ESD 活動支援センター（仮称）設置準備委員会委員名簿及び出席者名簿」のとおり。

3. 第 2 回準備委員会の進め方について

事務局から第 2 回九州地方 ESD 活動支援センター（仮称）設置準備委員会（以下「準備委員会」という。）の進め方を説明（資料 2、参考資料 1-1、1-2）。

4. 九州地方 ESD 活動支援センター（仮称）の活動の目指す姿について

事務局から、九州地方 ESD 活動支援センター（以下「九州 ESD センター」という。）の活動の目指す姿並びに九州・沖縄地方の地域課題及び課題解決に向けた重点取組の素案を提示（資料 3、参考資料 1-1、1-2、2）。

また、第 1 回準備委員会で指示のあった沖縄地域における ESD 環境教育に係る意見交換会の結果について、EPO 九州から説明（参考資料 1-3）。

資料 3 の事務局案に対する意見等は次のとおり

委員

・九州は、中国や韓国との人的交流が活発で国際交流が盛んであり、自然や歴史も含めるとアジアの玄関口と感ずるため、そういう意味で特性ではないか。

委員

・資料 3 の課題を見たとき違和感があった。これまで各地での農村関係の祭りや神話的祭り、離島での文化の継承、お正月などの多くのニュースに触れ、そういったものはまさに ESD ではないかと感じた。

今から新しい教育を行うのではなく、地域特性を考えて、その土地で生きていく上で伝え続けなければいけないものを受け継いでいくものではないか。もしくはそれが途切れそうなときもう一度復活させる。これを勝手に「ESD のあとづけ作業」と呼んでいるが、九州・沖縄地域には多くの ESD 取組が現存しており、この掘り起こしが地域 ESD 活動の把握に繋がるのではないか。その部分が資料には明記されていない。

例えば、農林水産で伝統的な山の木こり、漁法はまさに ESD ではないかと思うし、有機農業

の農家数も九州・沖縄地域は多い。それは持続可能な地域、産業、社会とのつながりをたくさんの方が少なからず意識しているからではないか。また、国立公園や世界遺産の数もずば抜けて多いため、その地域の保全活動や環境教育もかなり進んでいくのではないか。そういう地域文化や地域産業がずっと受け継がれて、いい状態で次世代に続いていく活動を掘り起こし、それをESDの先進事例として後押しする。そういった活動も必要ではないか。

・これらを踏まえ、資料3の「地域課題の解決に向けた重点取組」の一つである「地域のESD活動を把握する」において、地域文化等を受け継ぐ活動を地域ESD活動として取り扱い、掘り起こすことを記載してはどうか。学校や社会教育現場だけではなく人々の営みの中でESDと呼べるものを見いだすことによりESDの理解も深まるのではないか。

・また、九州・沖縄の中で規模は小さくても継続して実施している事例を把握したり掘り起こしたりすることも必要ではないか。

委員長

・既にこういった活動されている方に「その活動がESDです」と理解いただくことも普及啓発の一つだろうから、広義の「先進的取組の拡大波及」の中に含まれると思う。いずれにせよ自然環境に基づく衣食住の地域文化や第一次産業、そういった点を記載すればいいと思われるため、そういう形で加筆修正を検討いただきたい。

委員

・さきほど委員が述べられたことはよくわかる。先進的な取組は多いが、資料3に伝統の継承はあまり入っていない感じを受けるので、工夫の必要がある。

委員長

・これはよく、トラディッションとイノベーションとして対比されている。その文言はどこかに入れられるか。

事務局

・資料3の「地域課題の解決に向けた重点取組」の一つである「地域のESD活動を把握する」に、いわゆる伝統文化も含めて把握し、地域ぐるみのESDとして結び付けて推進していくこととしてはどうか。

委員

・九州・沖縄地域では地域資源として、自然の恵みへの感謝の意を示す神楽や祭りが豊かにあり、これらをテーマにした環境教育もあるため、「九州・沖縄地方のESD推進上の特性」に入れていただきたい。

ユネスコエコパーク認定に向けた取組の中で地域の方に生態系の話をする際、自然への畏敬の念のことを話すと、ずっと理解していただけた部分があるため、自然への畏敬という意味での祭りなどは地域資源として大事ではと感じた。

委員長

・資料3の「九州・沖縄地方のESD推進上の特性」において、「人文・社会現象には、様々な面から見た自然への畏敬の念が基層にある」と記載する方法もあるかと思う。

5. 九州地方ESD活動支援センター（仮称）の活動の方向性と目標について

事務局から九州ESDセンターの目標と活動の方向性に関する素案を提示（資料4）。

資料4の事務局案に対する意見等は次のとおり

（1）目標1について

委員長

・活動の方向性における「認知度向上」について、「情報発信についてはウェブサイトを活用する」と記載されているが、もう少し掘り下げる必要がないか。

事務局

・第1回準備委員会において委員からESDの認知度が低いというご意見をいただき、それに対応した事務局案の活動の方向性をお示ししたところであるが、これでは効果の低い取組ではないかと危惧している。認知度向上のためには、ターゲットを絞る方法や情報発信のためのツールの在り方など工夫する必要があるかと思うため、修正の必要がないかご検討いただきたい。

委員

・目標はESDの認知度向上ではなく、市民がESDの目指す考え方をもち実際に行動することにあるのではないか。先ほどの例のようにESDを知らなくてもESDに近い活動をしている方は多いため、認知度向上ではなく「ESDとは何か」を理解、浸透させることに近いニュアンスで記載した方がよいのではないか。認知度向上と書くと数字だけが目的になるので、表現は配慮してほしい。

（2）目標2について

委員

・活動の方向性の③で「行政関係者」とあるが、様々な取組を進める上で、教育委員会や環境部門など自治体と連携しないと難しい部分がある。何らかの形で関与していただいた方がよい。

委員

・活動の方向性の④で「地域ESD拠点」とあるが、当面の間、まずは先進的な取組を行っている団体を対象に形成・活動の支援を行うということか。

事務局

・ESDネットワークの成果目標は、GAPの2019年を踏まえ、まずは2019年を目標としている。期間が短いため、当面先進的取組を行っている団体を対象としたい。

(3) 目標3について

次第7で説明予定の地域 ESD 拠点について、資料4-1で触れられているため、この時点でEPO九州から説明(資料7)。

また、オブザーバーとして参加している ESD 活動支援センター次長から、地域 ESD 拠点について説明。

(4) 目標4について

事務局から、目標4及びその活動の方向性では、第1回準備委員会における委員からの提言(参考資料3)に基づき九州 ESD センターが技術的・経済的な支援を行う仕組み作りを検討することについて記載したこと、具体的には来年度の EPO 事業としてまずは企業から経済的支援を引き出すためのノウハウ抽出を目指すこと等について説明。

委員

・地(知)の拠点整備事業(COC)として大学と産学官が連携した事業が行われているが、こういったものと考えていいのか。

事務局

・ここはそうのように考えていない。EPOの事業としてとらえている。

委員長

・北九州まなびと ESD ステーションは、COCでの取組か。

委員

・COCではなく、大学間連携共同教育推進事業というCOCの1年前にあった事業で採択されている。

委員長

・第1回準備委員会でそれが話題になり、私が「財源の持続可能性」と申し上げたため、今回の資料においても活動の方向性として「経済的・技術的支援」と記載されていると思われるが、実現可能か疑問がある中、あまりにも具体的すぎると感じる。そこで、経済的・技術的支援の意味を含めた「多方面からの支援」、「多様な様々な支援」などの表現にしてはどうか。

委員

・今の意見に基本的に賛成。鹿島市のラムサールやユネスコエコパーク、世界農業遺産、ユネスコ世界ジオパークなど世界基準の持続可能な地域づくりの仕組みを有する場所は、地域や行政も関わっているため、経済的にも地域活性化が必要な要件になっている。これらの地域も先ほどの先進的な取組の中に潜在的に含まれるのではないか。今の段階では「多方面からの支援」という記載で構わないが、最終的には、経済的支援を行う仕組み作りを行う必要があるのではないか。

ここで、事務局から、「地域ぐるみの ESD 活動の推進」を図るための具体的な活動内容を図示した資料 4-2 について説明。

(5) 目標 5 について

特段の意見はなし

(6) 資料 4-1 全体について

委員長

・今後支援する分野については、自然環境教育が主体になろうかと思うが、事務局では、これに加えて公害教育、平和教育を想定しているか。

事務局

・委員からご意見をいただければ、今後そこに力点を置くことも検討すべきと考える。本日、委員から地域の伝統文化も大事とご指摘いただいたが、地域ぐるみという点では欠かせない視点と思う。分野としてこういう部分も欠かせないというものがあれば、この機会にご意見いただきたい。

・地方 ESD センターは EPO を活用するように位置付けられているが、次年度からの EPO 九州の請負団体を選定するため、今年度中に企画競争を行う必要がある。企画書を募集する際、この準備委員会で検討された活動の方向性（資料 4-1）を公示して、これをベースに具体的な活動内容を請負団体から提案させて九州 ESD センターをスタートさせていきたいので、力を入れるべき分野があれば、ぜひお聞かせいただきたい。

委員長

・先ほど挙げた、環境教育、公害教育、平和教育、委員から提案のあった伝統文化、またアジアに近い九州・沖縄ならではの国際的な意味合いを持つものもある。

委員

・九州 ESD センターの活動の目指す姿というのが、地域の主体と協働連携しながら地域ぐるみの ESD 活動を推進するという点にあるのであれば、環境・経済・社会のバランスを保ちながら広い意味での地域資源を守り、次世代に伝える活動が理想。

持続可能な地域づくりを進める場合、地域の環境づくり、地元の経済・生活を成り立たせる生業づくり、地域を誇れる後継者育成など人づくりの三本の柱があって初めて持続可能な地域になっていくように見える。例えば農村地帯で野生生物が元気になる田んぼやお米を作り、それに価値を付加して農産物を少し高く売り、加工品も地元のレストランで利用することで、グリーンツーリズムやエコツーリズムができる。そうすると初めて後継者育成までつながって、環境づくり、生業づくり、人づくりができるようになり、その中で初めて「持続可能」な地域となる。そうなるといういろいろな分野が入ってくる。

ESD を目指して環境教育に取り組む場合、経済的な視点が含まれていることが少なかった。ラムサールやユネスコエコパーク、世界農業遺産などの世界基準で取り組んでいる地域は、地

域を元気にする経済的な要素も加えて行政も力を入れている。このため、ラムサールやユネスコエコパーク、世界農業遺産などの分野を加えることが必要だろう。今すぐに支援することは難しくても、先進事例として取り上げたり分野の中に取り組みることが必要ではないか。

委員長

・サステナビリティを追求する上で環境・経済・社会のバランスを考えると、先ほどのご発言は広義の環境教育、つまり自然環境を保ちながら経済も産業も構築していくということであるため、広義の環境教育の中に含めてもいいのではないか。公害教育も広義の環境教育に入ると思うが、学校教育、社会教育など「〇〇教育」を多く作ると現場に負担感が生じ、ESD が受け入れられないおそれもあるため、分野としては、伝統文化を含め4つ程でいいのではないか。あるいは「〇〇教育」と表現しなくても、こういう分野の教育と表現してもいいのではないか。ほかに強化したい分野はないか。

委員

・いろいろな分野をとりあげてそこを強化するのが大切なのではなく、委員がおっしゃった環境・経済・社会のバランスを保つことがESDの中心になるべきところ。ESDで新しく取り組むとすれば、どんな社会を作るにしても、環境と経済と人づくりが持続可能になるバランスをどう保つのかを明らかにすることが必要ではないか。自然環境を守るために世界自然遺産に認定されたとしても、多くの観光客が訪れることで自然環境の質が落ちてしまつては本末転倒。バランスのとり方の考え方を伝えるのがESDでは。

分野に教育とつけることにあまりこだわらなくてもよく、九州・沖縄地域ではバランスのとれた持続可能な社会の作り方の検討を強化すると書き加えるのが大切では。

委員長

・そのあたりの整理を事務局にお願いします。

委員

・先ほどの皆さんの説明では、共存できる持続可能な社会の形成というものが何か分らないと思う。例えば環境を崩して工事して、人間の経済の発展につなげる場合があるが、環境を壊さずにそこにあるものを使って共存する道もあるのではないか。海苔と鳥の戦いではなく、海苔と鳥の共存。追い出すと別のところで影響が生じるので、そういうことも一つの方法では。

委員長

・これは共生教育という言葉に置き換えられる。サステナビリティをどう具体化するかという議論であったが、再度サステナビリティそのものの話題になりそうなので、ここで議論を終わりにしたいと思う。

事務局

・資料4-1はEPO九州運營業務に係る企画競争で公示する必要があるため、本日も指摘のあ

った「認知度の向上」の表現は「ESD の理解促進」に変更する予定であるが、ご了解いただけるか。まだ検討中の資料だが、これをベースにするということで取り扱いたい。

委員

・目標2の活動の方向性②について、「ESD 活動に関する資料の整備」と記載されているが、「教材」の言葉がない。「資料」に教材・ツールも含まれる不明だが、教育活動であるため、「教材」と明記されているとこの資料4-1を参照する者も安心するのではないか。

委員

・「教材」と明記されていた方がわかりやすい。

委員長

・では、明記していただきたい。

6. 九州地方 ESD 活動支援センター（仮称）の実施体制について

事務局から、九州 ESD センターの実施体制に関し、資料5の対策1及び対策2並びに準備委員会の委員が九州地方 ESD 活動支援企画運営委員会（仮称）（以下「九州地方 ESD 運営委員会」という。）にスライドしていただくことについて委員からの意見を伺いたい旨説明。

委員

・EPO 九州の運営委員会の委員にはどういった方がいるか。

宮崎文化本舗

・委員の中には EPO 九州の運営委員の方もいらっしゃるが、各県の環境保全活動団体を実践されている方を選抜し委員に就任していただいている。ESD を実践している方々にご認識いただきたい。

委員

・九州地方 ESD 運営委員会を分科会として位置付ける場合、その委員は EPO 九州の運営委員会にも携わるのか。

事務局

・九州地方 ESD 運営委員会の委員から2名程度、EPO 九州の運営委員にもなっていただきたい。

事務的な整理ができていないが、九州地方 ESD 運営委員会から委員が2名程度 EPO 九州の運営委員会に参加していただいて、成果内容等をご報告いただくことを想定している。

委員

・例えば、ESD を実践している方が EPO 九州の運営委員であれば、その方たちが九州地方 ESD 運営委員会の委員を兼務してはどうか。

事務局

- ・EPO の場合、どうしても環境分野に偏っており、例えば教育委員会の関係者は委員にいない。また、可能な限り企業にも加わってほしい。

宮崎文化本舗

- ・実際、EPO 九州の運営委員はプレイヤー（活動家）ばかりなので、教育委員会の方などにご助言いただければ、EPO 九州の運営委員会もより機能するのではないかと。

7. 九州地方 ESD 活動支援センター（仮称）に期待するものについて

委員長

- ・次第 7 について、九州 ESD センターに期待するものを各委員から 1 分程度でご発言願いたい。

委員

- ・九州 ESD センターには、先進的な地域を伸ばす役割もあると思うが、ぜひとも底上げにも力を入れていただきたい。具体的には、研修に関する支援、例えばこれまで当市が活用している研修プログラムについて足りない点の助言などを行っていただきたい。

当市が目指す街の姿は「誰もが憧れる上質な生活都市」であり、その実現に向けて地域主義を掲げている。九州 ESD センターに人材を派遣していただき、ESD の理念に沿った人材育成をしながら、地域のまちづくりにも取り組んでいきたい。

委員

- ・今回 1 年間かけて市内の全団体からラムサール条約を中心とした環境の利活用計画のとりまとめを行っているので、同計画に沿って持続可能な社会の形成に取り組んでいきたい。

また、企業も含め全市民を対象に自然環境保全のためにできることをやってみようと呼びかけている。

さらに、専門家の指導を仰ぎながら今年度中に環境教育プログラムを完成させ、各学校に取り入れていくこととしている。

委員

- ・九州 ESD センターに期待することは、2 つある。

1 つ目はラムサール、ユネスコエコパークや世界農業遺産など、行政と民間がセットでその地域の環境づくりや経済・生業づくり、教育活動など人づくりに取り組んでいる地域とネットワークを形成していただきたい。

2 つ目は、地球環境問題には多くの分野があるが、愛知目標等もあるため、緊急課題である生物多様性の減少の対策に取り組んでいる九州管内のメンバーが交流する機会を創出することを期待している。

委員

- ・事務局からの説明や委員からの意見を伺い、九州 ESD センターの役割としてのキーワードは

「つなぐ」ということが分かった。「情報」、「人」、「組織」、「活動」、「学び」、この5つの観点で「つなぐ」ことではないか。これからは特に「人」、「組織」に光を当てていかなければならぬため、九州 ESD センターには人材バンクを充実させていただくとありがたい。

ESD 活動を広めるという観点から、地域 ESD 拠点が必要な役割であると思った。特に資料 4-2 で示されている「地域ぐるみの ESD 活動推進」の図は、当市の ESD コンソーシアムの図と一致しているので、私どもの ESD 推進活動も間違いないと認識した。

「つなぐ」という意味では、昨年、当市が九州管内の教育委員会を対象にした ESD サミットを開催するに当たり、関係者をお呼びするのはハードルが高かったが、九州 ESD センターの支援によりこの垣根を取り払っていただければもっと ESD 活動主体のつながりが広がっていくのでは。情報連携だけではなく行動連携まで支援することが九州 ESD センターの大きな役割であると感じた。

委員

・ ESD でネットワークを作ったとしてもテーマが明確でなければ果たして機能するのか疑問。例えば熊本だと「阿蘇の草原を未来に残したい」といった具体的なものでないと一般市民、企業サイドからは分かりにくい。人材育成を進めるうえで、成果が見える化できるように、運営面では具体的なターゲットを定めて取り組んでいただきたい。

委員

・ 産官民学連携で環境保全、社会づくり、環境社会づくりとして、少しでも地域の問題を解決している方は多いが、九州 ESD センターの支援が得られるようになると、今までつまづいていた「不安のない明るい環境社会づくり、人材育成」に大きくステップが踏めるのでは。目標 4 「先進的取組の拡大、波及」に特に期待している。

委員

・ 九州 ESD センターとしての目標を達成するための活動を着実に実施してほしい。

北九州は公害を解決したものの、少子高齢化が進展しており、非常に課題が多い街だが、市民がこのことをポジティブに考え、解決に向けて取り組むことが ESD だと理解している。持続可能な社会を作るという原点に戻って北九州市で活動していきたい。今後もサポートをお願いしたい。

8. アウトプット項目の確認について

事務局から、九州 ESD センターの活動の目指す姿等を追記したため、第 1 回準備委員会で示したアウトプット項目が変更となった旨説明（資料 6）。

委員からの特段の意見なし

9. 地域 ESD 活動推進拠点について

次第 5 で説明済みであるが、EPO 九州から補足として、i) 九州 ESD センターが単独でこの目標を担うというよりは地域 ESD 拠点と共に協力しながら対応するものと考えていること、ii)

九州 ESD センターが個別の対応をワンストップで担うのではなく、マルチストップの窓口として地域 ESD 拠点を位置づけたいと考えていること、iii) 地域 ESD 拠点については、多様な役割分担の仲間であり、九州 ESD センターと共に ESD ネットワーク推進を形成し、お互いにハブとなることを想定していることを説明。

委員からの特段の意見なし

10. 閉会

事務局から事務連絡を行い、閉会